
Golden B L O O D アストライア戦記

銀流香炎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Golden BLOOD アストライア戦記

【Nコード】

N9079A

【作者名】

銀流香炎

【あらすじ】

ごく平凡に暮らして行ければいいと思っていた少女・あやの絢乃。しかし、彼女の行く先には避けられない運命が待ち受けていて!? 壮大スペクタクル、異界シリーズ再び!

プロローグ（前書き）

初めまして、銀流香炎（前、維月十夜：訳あって名前を変えました）と申します。

異界に生まれる筈だった少女が、運命の「うねり」によって人間の世界に生まれてしまい、故郷の危機に彼女が無事帰還を果たすというお話です。

久々なので拙いかも知れませんが、どうぞ謁見のほどを。（汗）

プロローグ

『^{あやの}絢乃、好きなものを選びなさい』

始まりは、本当にこんな些細なことだった。

あたしは大手衣料メーカーの、社長令嬢。

世間的に言う、いわゆる『お嬢様』という種類の人間だった。

ムダ　そして無謀とも思える広い庭と敷地には、これでもかという位に豪華な屋敷が聳えている。

ものごころ付いた頃から、裕福が当たり前だった。だからいつものように父に連れられて、得意先の毛皮商に品定めに行ったのだ。

札幌郊外（郊外といっても、中心部までが離れているだけ）の自宅から専属秘書の運転で、中心部を経由して目的地まで向かう。

「どうなさいました、顔色がよろしくありませんが」

「なんでもないわ……ちょっと虚しいだけ」

ルームミラーに、秘書の華奢な赤縁メガネが映っている。

メガネの奥の、軽薄そうな一重眼がスツと細められた。

絢乃は、彼女の運転で外出するときに味わう無音　いや、そうではない。実際のところ、彼女のことが大嫌いだった。

「なにを仰っしゃいますやら……お館様が引き取ってくださいってから、夢のようによくしていただいているではありませんか。たかが養女なのに光栄なくらいです」

そういう性格なのか。

年嵩の彼女は、いやみを言って自分がどういう反応をかえすのかを楽しんでいるのである。

だが、絢乃は特に抵抗したりはしない。目的地で父とは合流する約束となっているし、それまでを辛抱すればいいのだから。

（この人嫌い……早く着かないかしら）

父と合流を済ませると、秘書である彼女は深々と礼をして屋敷へと戻っていった。

店内には、様々な毛皮が溢れている。

キツネにテン・鹿など目移りするくらいに。

あたしは、手近にあったラビットフアを取って首に巻いた。

理由を言えばなんのことはない、それが幾分か可愛らしかったからだ。

だが、父はそれが気に食わない
金持ちらしくない、と。

「なんだ、絢乃は兎がいいのかい？　たくさん持つてるだろう。他のにしたらどうだ」

あたしは無言で毛皮を棚に戻す。

確かに父の言うとおりなので、反撃の余地がない。

なによりこれといった物が見当たらなかったし、新作が入ったからと招待されたので来たまでに過ぎなかったのだ。

父を振り向くと店主と話し込んでいて、当分途切れそうにもなかった。

仕方なしに店内をうろつく。

鹿皮は見かけはともかく、ごわごわしていてどうにも座り心地が悪い、熊は

たわしのようなので遠慮しておいた。

兎も狐も、その他諸々の物を自分は持っているのだ。

（さすがに、熊は持っていないけれど）

けれど、一つだけ。

一つだけ、目を惹く物があった。

闇に溶け込むような漆黒。

B l a c k W o l f .

黒狼の毛皮だった。

店の片隅。まるで隠すように置いてあったそれは、どこか孤独な才
ーラを出していた。
気がつけば購入していて……。

決して、買う意志が働いた訳ではないのに。

ただ、『声』を聴いた。

重く、絞り出すような声を。

【見つけた

我が同胞よ】

彼方から響く声が、直接頭の中に轟いて渦を巻く。

【お前の未来は混沌だ
よ】

人としては生きられぬ

衝撃の次にきたのは、鼓膜に穴が開きそうな静寂だった。

目の前に父親がいて、店主がいて。
心配そうな素振りを見せている。
しかし、その凡てが形を結ばない。あるのは、声のない映像だけだ。

【 目を開けて、よく見てみるがいい。ここが、お前の在るべき世界か否か】

「誰、あなたは誰なの？」

しかし、声は応えることなく先を続ける。

【決めるのは、お前】

悪魔のような静謐が急激に途切れると、音の渦が一気に押し寄せてきた。

「絢乃、しっかりしなさい……ああ、ひどい顔色だ」

絢乃は、背を支えられて改めて自分の状態を理解する。

父と、店主曰く 自分は黒狼の毛皮を着たまま、店

の隅で倒れていたそうだ。

ちなみに、毛皮を着た記憶はない。

目を惹かれただけで、触れずにいたはずなのである。

どう考えても、矛盾が残る。

帰宅したあたしは、父から事情を聴いたのだろう 騒ぎ
立てるメイドをぐぐり抜け、購入したての毛皮を抱えて自室に避難
した。

疲れているときに、これほど疲れを覚える物はない。

（ああもう……やめろ、余計に疲れるでしょうが！）

木目のドアが、音もなく閉められる。

「これだから、メイドって苦手……秘書だかメイドだか、もううんざり」

【鏡をごらん。お前の姿が映っているぞ】

直接頭の中に響く声は、不思議と恐ろしくはなく。
むしろ訴えかけるような響きを持っている。

「貴男は誰なの？」

彼方からの声に、絢乃は小さく問いかけた。

【やっと見つけた。こんな場所にいたのか

我が娘よ】

「えっ?!」

絢乃は、その身を凍らせる。

養女だとは知っていたが、これは一体どうしたことだろう。

【毛皮を、鏡に映してみなさい】

強張っている彼女の様子を察したのか、柔らかな声が促した。

「これを、映せばいいのね……?」

絢乃はおずおずと窓際に据えた姿見に、毛皮のコートを映してみる。

【そう。見なさい……これがお前の本当の父の姿だ】

暗い部屋の中、月明かりに照らされた姿見がぼんやりと光を帯びていく。

夢のように美しい光景だが、この現実を俄には信じることができなかった。

「貴男が、お父…様？」

鏡の中には、漆黒の髪をした青年が映っている。

滑らかな漆黒の髪に、そして青い　アイスブルーの瞳。

【情けないことに、お前を捜している内にこんな姿になってしまった】

「つまり、殺された…と」

【そのようだな。だが肉体を棄てた分、いくらか自由なのだ】
と、鏡の中の実父は、楽しげに語る。

【それにしても……人の中で育った割には驚かな。さすがは俺の娘だ】

「なに喜んでるのよ。殺されちゃったんでしょ？　やっぱりそれって幽霊なのよね？」

【まあ、そう言う部類にはなるがな。なに大したことじゃない】
（充分大したことだってば！　でも、確か幽霊って鏡に映んないんじゃないかったかしら）

「あの、お父様……鏡に姿を映せるなら、実際に形を取るのも可能なんじゃないの？」

しばしの空白の後、考え至った絢乃はそっと鏡面に触れて呟いた。
（すごい美形……なんて素敵なのっ）

「それに……素敵なもの」

ぼそぼそと呟いた絢乃の顔は、トマトのように赤くなっていた。

【ん、なにか言った？　そうか、その手があったか】

いま知ったように言う彼に、絢乃は小さく肩を竦めた。

【では早速】

鏡面が鏡のように揺らぎ始めると、ぬらりと地黒な片腕が突き出される。

双肩の出現と共に、頭もが露わになった。

そして凡てが抜け出した後
姿見は音もなく崩れ去ったのだった。

【ま、実体があるうとなかろうと……不自由することはない。現にこうして触れたりもできるし】

温かな大きな手が絢乃の頭に触れる。実体がないのに、どうして温もりを感じるのかが不思議だ。

「今まで、悪かったな。『あの時』はこうするほか方法がなかったんだ」

「一つ聞いていい…？」

【何だ？ 一つといわず幾らでも聞いていいぞ？】

絢乃に会えたのがよっぽど嬉しいのか、彼の尻尾がフル回転してるように見える。

これは、目の錯覚なんだろうか…？

絢乃は居住まいを正すと、目の前の実父にそつと問うた。

「その、耳と尻尾はなに？ 一体どこの民族？」

どこか異国の民族で、そういった扮装をする一族がいるのを聞いたことがある。

きつと、その衣装に違いない。

だがそう思ったのも束の間、彼はにこやかに絢乃の希望を叩き割った。

【なにかと思えば、自前に決まっているだろう？ それに、お前だって造作は同じなんだからな。ほら、鏡にも映ってるだろう】

ゆるくパーマの掛かった茶色いロングヘアから、それと同じ色の毛玉 いや、耳が覗いている。

絢乃は眩暈を隠しきれず、いささか過剰なくらいにキリキリ舞いをした。

「やだ、やだやだ……あたしって人間じゃないのー!?!」
「正確には人狼だな、人間じゃあない」

異界の風（前書き）

ごく普通の少女として暮らしていた絢乃は、黒狼の毛皮を買ったことで数奇な運命を辿ることになる。

彼女の前に現れた実父だと名乗る青年があらわれて ！？

異界の風

「正確には人狼だな。人間じゃあない」

「人狼って、狼男のこと？」

人狼と聞いて、咄嗟に思いつくのはそれしか見当たらない。

絢乃は恐々と聞いてみた。

「ふむ、昔の人間の偏見の一つだ。人狼は男女ともいるんだがな」
「ということは、あたしの本当のお母さんがいるって事にならない？」

「もちろんだ、泣く泣く手放したんだ。会えば必ず喜ぶだろうな」
まじめ顔で頷いた若い父に、絢乃は知らずのうちに一歩ずつ後じさっていた。

先刻の言葉を思い出したのである。

「人としては生きられない。そして、ここはいるべき場所ではない」と。

「あたしに…どうしろと？」

「そうだなあ、このままでは存在自体が歪んでしまう。元々と暮らすべき場所に連れ帰るしかあるまい。来なさい」

グイ、と腕を牽かれる。

嚴重に鍵をかけたはずのドアが、錠を開けもせずに容易く開いた。それだけではない。

通りすぎる空間には音はなく、いくらか色褪せて見える。

セピアに染まる空間はまるで、古い映画のワンシーンのようだ。

音もなく玄関の大扉が開き、表庭に躍り出た。

ゆっくりとした動作に思われたが、実際それは恐ろしく素早い物だった。

庭に降ろされた絢乃は、あまりの唐突さに泡を食って転びかける。

「お父様！ あんまりだわっ、どこに連れて行く気なの？」

「とりあえずはこの家から出るとしよう。いやな　　ここは死の気配に満ちている」

彼が指を指した先には古ぼけた小さな物置があり、まわりで頻りに鴉が啼いている。

「ああ、そこには狩り小屋があるのよ。猟銃とか罠だとか、怖い物ばかりおいてあるの……でも死んで？」

問おうとした矢先、激しい咆哮が二人の背を叩いた。

庭には、2頭のシェパードが放し飼いにされている。

彼らが侵入者を見つけたのだ。

「貴様！　どこから沸いて出た！」

「お嬢様を離せ！　さもなくば……っ」

低く構え牙を剥きだして唸るシェパードに、彼は深々と溜息した。

「お父様！？　なんだか声が聞こえるっ」

「ノンノン……『お父様』じゃなくて、セイル」

慌てて耳を押さえた絢乃に、セイルは人差し指を振ってウインク。

「やれやれ。むやみに牙を剥くんじゃないよ。誇りもなにも持ち合わせてないのか」

「なんだとっ！　我らはそれが仕事なのだっ」

絢乃は、セイルがどこか楽しそうに口角をあげたのを見逃さなかった。

「　仕方ない。犬如きに姿を見せるのは惜しいが。そうするほか道はないんだろうな」

セイルの姿が音をたてて歪んだ。

手が変形して鉤爪になり、骨を軋ませて顔が尖っていく。
凡ての変化が終わった後、そこには漆黒の姿を持つ

ワグ
巨狼がいた。

威嚇に、悲鳴をあげて退散する二頭の犬。

セイルが彼らを一扫するまで、そう時間は掛からなかったように思う。

静まりかえった庭で、絢乃は微動だにできず固まっていた。

「はーっ、久々にこの姿になったなあ。どうした、格好よかっただろっ?」

尻尾を振りふり、その場で足踏みする姿は、褒めて貰いたい時に犬がする仕種に非常によく似ていた。

「それって褒める所じゃないんじゃない? ……触ってみても、いい?」
寄ってきたセイルの頭に触れて、絢乃は息をのむ。

骨格のしつかりした、威風堂々たる姿。

艶々と黒光りする毛皮は、抱き締めたならさぞ心地がいいだろう。
これで実体がないなど、到底信じられない。

「好きなように」

叩く尻尾が、嬉しさを伝えている。

「よしよし、偉い偉い」

多分、その言葉が欲しかったのだろう。セイルはその場でくるりと回って足踏みをする、元の姿に戻ってしまった。

「さて、そろそろ行くかね」

「なによ…なんか急に年寄りくさい」

「うるさいなあ…」

外見は若いのだが、年甲斐もなくブータレるセイル。

「年寄りとか言うな。あんまり笑うと連れ手かないぞ?」

「ねえ? 行き先が分からないと、行くも行かないもないじゃない。決めるのはあたしなんですよ?」

「う、うむ…」

しばらく口ごもって、セイルは話し始めた。

絢乃が本来育つべき世界のこと。なぜ、離ればなれになったかを。

「アストライア それがお前の生きるべき国の名前だ。そして俺たち人狼族はその国の凡ての人口を占める種族」

「……人狼……?」

「基本的には人型を保つが、だがその本性は妖獣…そこがエダイン（人間族）とは違っている」

絢乃の、白地に黒糸で薔薇の刺繍の入ったスカートが、風を伴って緩やかに揺れる。

薄闇が蟠る庭で、セイルの瞳は心なしか光って見えた。

「そうだ、言おうと思っていたんだが、お前の名前を付け直させてくれないか?」

「名前を? なぜ?」

「名前には本来、存在を縛るチカラがある。お前の名前を付け直せば『人間』という枠から解き放たれるんだ」

「付け直すって……今更」

「譬え可笑しく思えようと、これには確かな意味がある。お前が生まれた時から決まっていた名前だからね」

絢乃は、眩暈を感じて二度ほど顔を振る。

いきなり真実を教えられても、理解に苦しむ。

いま辛うじて分かるのは、自分が生物の枠を越えた存在であるということだけだ。

「【エヴァ】だ。お前の真名はエヴァ……すっかりしまっておくん

だよ。決して他に明かしてはいけない」

「やつ……なに、なに!？」

その言葉が呟かれてすぐに『絢乃』は鞭打たれたように身体が引き絞られた。

存在を縛る鎖が、緩み始めたのである。

『鎖よ、碎けるがいい

さあ、覚醒の時だ』

頭の奥深く

いや、どこともつかない場所深くに響く声は、

甘く体の芯に溶けていった。

異界の風（2）（前書き）

ごく普通に暮らしていられればいいと思っていた主人公・あやの絢乃。だが、彼女には秘密があつた！？

毛皮となつて主人公の元に辿り着いた実父・セイルに誘われて、本来暮らすべき世界への帰還のため、絢乃は異界の門を潜ることに。

異界の風（2）

気怠くモヤがかかったような頭の中が、急速に晴れていく。そうして、エヴァは『変化』に気づいた。

尖って透き通る爪は、まるで硝子細工のよう。

口の中には鋭い牙の感触。

そして、青の瞳と目があった。

セイルのものではなく、それは池の水面に映った自分の目。

「すごい…あつ、やだ、あたし」

思ったことを口に出してしまい、エヴァは羞恥に顔を赤らめる。

「そうか？ 俺は正直な反応で嬉しいぞ」

「うー、恥かしい……」

目覚めのせいなのか、今まで鈍重だった身体は羽が生えたように軽やかになっていた。

絢乃だった頃はどちらかというと丸顔で、今は顎のラインが尖って鋭角的な様相になっている。

「美しいじゃないか。野生美だな」

「なっ、最後の一言は余計！」

眉間に渓谷なみの皺を寄せたエヴァは、セイルの尻尾を思いきり踏みつけた。

だが、暖簾に腕押しとはこの事だろう。足は彼の尻尾を貫通してしまっ

「こういう時にも便利だな。即物的な攻撃は聞かないようだ」
（そっか。だって幽霊なんだもんね）

けろりと笑うセイルに、エヴァはいくらか呆れて項垂れた。

「お前の目覚めも済んだことだし、本腰いれて出発するでしょう」
「セイル？」

「ん。位置も……丁度いいな」

セイルは湖の中程まで歩いていくと、中天に漂う月に右手を伸ばした。

池の深さは、確か結構深かったように思う。

子供の頃に溺れかけた池は足が着かないほどに深く、今でも多分、胸あたりくらいではないだろうか。

「なにしてる、心配せずとも沈んだりしないから安心しなさい」

セイルは、池辺でまごついているエヴァの手を引いて困ったように微笑む。

エヴァは、あまりの美しさに赤面を抑えきれなかった。

異界の風（3）（前書き）

どこにでもいるごく普通の少女、絢乃。

だが、彼女には秘められた出生の秘密があつた！？

社長令嬢である絢乃だが、実は養女。

彼女は、人間ではなく、人狼の子供だったのだ。

毛皮となって絢乃を迎えに来た実父・セイルに誘われて、

直された少女は、本来生きるべき世界の門を越えた。

【名づけ】

異界の風（3）

「月よ そなたの呪力を、我に」

光の宿る右手を水面に触れて、セイルは小声で何事かを呟いた。
しかし、エヴァにはそれが聞き取れなかった。

だが全く聞こえない訳ではなく、空気が攪拌されるノイズに混じって『naiad』という単語を聞いた。

「わつ、なあにこれ？」

抱き寄せられたエヴァの周りをビーズのような水の粒が舞い、それは次々と足元で別の形を形成していく。

まるで虚^{うつろ}に響くような水音の後、二人の前にウォーターブルーに輝く『門』が出現した。

「……………きれい……………」

「きれいだろう？ 来なさい私の愛しい姫」

ぽかんと立ち尽くしているエヴァを引き寄せてセイルはウィンク。
「う、うん……………」

遅しい胸板に抱き寄せられて鼓動がおかしな具合に跳ね上がり、エヴァはポツと顔を紅潮させた。

「この門は長くは保たないんだ」

そのまま抱きあげられて、エヴァは門の中の領域に足を踏み入れた。

もの凄い風圧が、全身を殴りつけている。削られ削られ、このまま消えてしまいそう。

譬えるのなら、流れ星になった気分だ。

「ていうか…なんで落下なの

！？」

突然すぎて怒る気にもなれないが、一応叱っておく。

「案ずるな、もうお前にも…本来備わっているチカラが仕えるはずだ。試しになにか言ってみなさい」

「いきなり言われてもっ…落下しながらなんて無理よーっ！飛べっ、とにかくとまって　！」

このまま、訳の分からない場所で死んでしまうのはごめんだ。

自分に『チカラ』とやらが備わっているとは思えないが、今はそんなことは言っていられない。

途轍もなく恥ずかしかったが、エヴァは叫んだ。

生きたい。

生きなきゃ。

生きなければっ！

途端に、落下の速度が凍結する。

別段に、なにをした訳でもないのに。

ゆるゆると降下するエヴァを、虹色の膜が包んでいた。

それはまるで、シャボン玉のよう。

しかし、それは硬質硝子のように固かった。

「あれ……？　止まった」

エヴァは、ユラユラと漂うように地面に着地する。

「セイル……？」

くるくると頻りにふり返って彼を捜すが、どこにも姿は見つからない。

まるで、どこかに消え失せてしまったかのように。

「エヴァ、済まない……私はしばし傍を離れねば」

「どこっ、どこにいるの？ 離れるって、もうどこにも見えないじゃないの！」

「エダインでは……辛うじて形を保つ依り代があつたが、今、ここにはそれがない。いわゆる意識体だけになった訳だ」

つまり、自分は今ここに置いて行かれるのだ。

エヴァは慌てて、もうどこにも見えないセイルを捜して虚空に手を伸ばす。

「ちよつ、ちよつと待つてよ……あたし、どうすればいいの。独りでどうしろって言うの？」

「生まれたばかりのお前一人を残して行かねばならないのは不安だが、だが、お前は一人じゃない。すぐに迎えを遣るから……それまで凌いでいてくれ」

「凌ぐって……そんな！？」

「生きる、生きていてくれエヴァ……お前なら、必ずできる。私は、そう信じているよ」

「セイル……セイル！？ 待つて、待つて！」

やがて、風の騒めきと共に声は聞こえなくなり。朦朧とした静寂の世界が唐突に訪れた。

エヴァの白い頬を、幾筋も涙が滑り落ちていく。

孤独な決意（前書き）

『ただ、平安に暮らせればいいと思ってたのに』
絢乃は真実を知り、そのさだめに戦っていた。

孤独な決意

ただ、エヴァの押し殺した嗚咽だけが響いていた。

「どうしよう……どうしよう、どこに、行けばいいの?」

のろのろと這うように起きあがると、そこは海に臨した断崖だった。はたはたと、髪が潮風に翻られて頬を打つ。

嘘のように真つ青な空の元。

轟々と海が、逆巻いていた。

「海……海だけは、どこの世界も変わらないんだ」

茫然と呟いたエヴァの声は、悉く風に削られて消えていく。海際の防風林に移動したところで、エヴァの膝が碎ける。

上体がのけぞり、狭まりかけた視界の端に青い青い空を見た。ばしゃり、と泥水が散る。

針葉樹の林が広がる防風林の中、エヴァは昏倒していた。

「このまま　死ぬのかしら」

死にたくはないけれど、行く宛もない自分はどうすればいいのだろう。

いま、辛うじて分かっているのは『自分は、ここに棄てられた』という現実だけだった。

何もかもがあやふやで、混沌なのに。なのに、腹時計だけは正確に作動する。

そんな、したたかな自分に、今更ながらに笑えてしまう。

「バカみたい……あたし、こんな所にのこのこと付いてきて」
再び、エヴァはゆっくりと起きあがった。

フラフラと足が向いた先は、砂浜だった。

寄せては還る波に浸される象牙のような砂を鳴らしながら、エヴァは波打ち際まで歩いた。

ぬるい塩水が、泥だらけの足を撫でていく。エヴァは水を掬って口を濯いだ。

これはなんだろう。見る限りでは、海にしか見えないのに

含んだ水の味は、苦かった。

浅瀬を渡って、砂州に上陸する。

押し寄せては巻き返してゆく波を何度か見送ってから、エヴァは海水に手を浸す。

冷たい温度が、手の皮膚を透して染み渡っていくようだ。

エヴァの口から、自然と感嘆の息が出た。

「お腹、すいた……」

思わず呟いてしまってから、エヴァは小さく嘔き出す。

こんな窮地でも、自分が知らずのうちに順応しているのが可笑しかったのだ。

「なによ、その割に……あんまり堪えてないみたいじゃないの」

今までなら、人の手によって作られた料理を食べただけだったが、これからはそうも行かない。

エヴァの憔悴していた瞳に、再び光が宿り始めた。

「さて、と」

取り敢えず、乾いた海藻にまみれた流木と小枝を拾って擦り合わせ
てみる。

火が点くかどうか、確かめているのだ。

だが、木片は熱を持ちしたが燃え出すには至らず。試行錯誤を繰り返す内に辺りは短時間の内にこっくりと暮れなずんでしまった。

「うっ、痛い……」

点かねど点かねど、エヴァは諦めなかった。

どんなに手が擦りむけて血豆ができ、火傷をしても闇の中、懸命に作業を続けた。

「あっ、点いた！」

エヴァの歓声と共に、暗闇に焰が灯った。

血まみれの手に、柔らかな温みがまといつく。

「あったかいな……あたし、ちゃんと生きてる」

空腹感是否めないが、なんとなく心が温かい。

無性に切なくなつて、エヴァは声を殺して静かに泣いた。

『生きている』事を、初めて大切に思った。

そして、空腹がこんなにも切ないことも。

【 一生懸命生きよう】

深い孤独の淵で、エヴァは固く誓ったのだった。

出逢い（前書き）

こんな筈じゃなかった…！

ごく普通の少女として暮らしていた絢乃は、黒狼の毛皮を購入したことで自らの秘密を知ってしまう。

実は絢乃、人間ではなく人狼族の姫だったのだ！

購入した毛皮（亡実父・セイル）に導かれて本来暮らすべき世界に帰還したエヴァ（絢乃）だが！？

出逢い

エヴァがいる海岸線を西に遡っていくと、街が現れる。

アストライア最大規模の街で、この大陸の首都であるイルダという街だ。

自然豊かな風景が広がり、その彼方には四方を奇岩の山脈。

東からエレド・ルイン（青の山脈）、西にエレド・エン格林（鉄の山脈）、南をエレド・ニムライズ（白の山脈）、北はヒサエグリア（霜降り山脈）が囲んでいる。

首都の北寄りの街・グリーズという場所から、エヴァと出会う定めを持つ者の、もう一つの物語が始まるうとしていた。

「アストライアの族長が身罷ったそうだぞ。しかも、エダインで」朝の静謐さが漂う酒場に、くつくつとさも面白げな笑いが響く。

カウンターに腰掛けながら、赤毛の少年がよこされたコップの水を飲み干した。

「ソーン……お前、また奴らの領地に行つて来たのか」

いくらか呆れながら諫める父に、少年・ソーンは悪びれた様子もなく話を続ける。

「エダインじゃ、俺たちはただの狼だもんな。それに面白いこと聞いたんだよ」

「面白いだと？ ソーン、お前もいい加減成長しない奴だな。『奴ら』を侮るんじゃない、我らと対極をなす唯一の一族だぞ」

「そんなの分かってるよ、聞き飽きたつてば。それより朗報だ、奴らの姫がエダインから帰還したらしい」

「見に行くとか言いだすなよ？」

そわそわと落ち着かない息子を窘めながら、ボレアスの長は窓の外

に広がる海原を、どこか遠い目で見つめた。

このアストライアには、2つの一族がいる。

一つは、大陸の大半を支配するセピュロスと少数民族ボレアス。元の種族は同じだが、これらは国土が創成された古えから争いが続き、今に至っている。

魔法大国アストライア

今は凍結状態だが、2つの勢力がぶつかり合うのは時間の問題だろう。

「とにかく、俺は行くよ。世界を見て回りたいんだ」

「一族を、出る気なんだな」先とはうって違った鋭い瞳で射抜かれ、ソーンは小さく息をのんだ。

（こいつももう18、斥候を任せても大丈夫だろう）

「よし、お前に斥候を命じよう……セピュロスに潜入し、油断させてから一網打尽にしろ！」

「出てもいいのか?! さすが親父、これが母さんなら絶対出してくれないからな」

「お前は一族の希望だぞ、それを踏まえて行つてきなさい」

部屋に飛び込むと、ソーンは早速荷造りを始めた。

身につけるのは愛用の革靴に、長刀。

小鍋に木匙、水袋…米と干し肉をいくつかカバンに詰め込んだ。

出発は夜半。

ソーンは、皆が寝静まった頃に出て行くことを決めた。

洋燈の薄明かりの元、闇がだんだんと濃度を増していく。

窓の外を伸びあがってみるが自分の持つ洋燈以外の明かりは見当たらず、遠くに集会所の櫓の明かりだけが明滅して見えた。

もう、どのくらい待っただろうか。

ソーンは灯りを消して、ゆつくりと動き始める。

足音を消して集落を抜け、広場に行き着く。

そのまま門を抜けようとしたとき、付いてくる気配に気づいてソーンはゆつくりと振り返った。

「母さんか……」

そこには、ソーンの母親・セレーネが佇んでいた。

「やっぱり、お前は行くのね……これを持ってお行き、きっとお前の役に立つから」

セレーネは、首から提げていた首飾りを外して息子の手に握らせる。火明かりに薄紅に輝く石は、まだじんわりと暖かった。

「ありがと……俺、きつと戻ってきて『一族の誇り』になるよ」

「そうね、行っておいでなさい……」

門を潜って、もう姿が見えなくなった息子を見送ってから、セレーネは小さく呟いた。

本当に、小さく小さく。

「あの子もついに……きつと、ここにはもう戻らないわね」

今までに3人の息子を見送ったが、終ぞどれも戻ることはなかった。

夜が明けていく。

淡色から色を増してゆく奇岩の山脈を見ながら、ソーンは大きく伸びをした。

「ふあー……いいねえ、自由ってのは」

心なしか歩調が軽く思えて、ソーンは小石を蹴り上げる。

「まずは……セピュロスを目指すか。俺にかかれば、セピュロスなんて粉々だぜ……うぎゃっ！」

意気揚々と出発したソーンだが、さっき蹴り飛ばした小石の仕返しに思いきり尻餅をついてしまった。

前途多難、とはまさにこの事だ。

「いってえ……てめえ石つころのクセに」

石に毒づきながら、再度仕返しとばかりに遠くへ蹴り飛ばす。

きりきり舞いをして転がっていく欠片を小気味よく思いながら、ソーンはぶすくれる。

「勢いで出てきちまつたけど……場所、知らないんだよな」

勢いで出てきたせいで、地図のことを念頭に置くのを忘れてしまったのだ。

「やばいな、これじゃあセピュロス殲滅より俺が野垂れ死にだ……」
ソーンは落胆しながらも、取り敢えずセピュロスではなく海岸線を目指すことにした。

「ああ、なんでこうなるんだよ。俺って、バカ」

この場合、今更気づいても遅かったりする。

海岸線では 青く凪ぐ水面から、豪快な水しぶきが上がっていた。

金色の髪が水しぶきと共にさんざめいては、水中に姿を隠す。
ちなみに、セイレーン（人魚）ではない。

陽射しに、ほこほこと暖められた砂上に脱ぎ捨てられた服が、その証拠だ。

エヴァは、初めこそ軟弱で順応性がなかったが、今では殆どのができるようになっていた。

空腹ならば捕らえて食べるし、眠ければ眠る。
本当に動物的だが、そうする他がなかったのだ。

陸に食べ物がないときは、裸で海に潜って魚を捕る。

元々染めていた髪は色が抜けて本来の金髪になり、本性の姿に戻った証拠で瞳の色も変わった。

「今日はこれだけ…か。少ないわね」

海水を含んだ髪を乱暴な仕種で振り払い、手早く服を身につけるエヴァ。

白いレースの上着は潮焼けして用をなさなくなり、スカートは所々裂け、動きにくいので膝丈で裁断されていた。

と、エヴァは敏捷にその動きを止めた。

サファイアの瞳が、鋭く細められる。

「誰だ、誰か　こっちにくる」

銛の切っ先をなぞって、エヴァは身構えたまま息を殺していた。

（何だろう、この足音は人だけど、気は抜けないな）

微かな、砂を踏む音がする。

それが、ゆっくりゆっくりとこちらに近づいてくる。

吹きすぎる風に金髪がさんざめいて、いつの間にかエヴァは物陰から飛び出していた。

その片手には、しっかりと武器を握って。

「誰だっ！」

ソーンは、佇んだまま動きを止めた。

いや、止めざるを得なかったのだ。

喉元には、突きつけられた銀の刃が光っている。

「ま、待てよ……待ってくれ、敵意はないんだ」

じりじりと、伝わってくる鋭い殺意に、ソーンの頬を冷や汗が伝った。

「……ホントね？」

おずおずと銛を降ろすエヴァに、ソーンは大仰に息を吐き出す。

「お前、セピュロスの女だな？」

緊迫した雰囲気が少しばかりゆるんだのを察して、ソーンは目の前の少女に笑顔を向けた。

「なにそれ。知らないけど」

だが返ってきた返事は険悪そのもので、彼が思っていたよりも、そんなに壁は薄まっていなかった。

奸算（前書き）

赤毛の少年（ボレアス族）・ソーンと出会ったエヴァ。
おかしな巡り合わせに戸惑いながらも、共同生活を始める。

一方、好意的なフリを続けるソーンは、エヴァを屠る手立てを密かに企てていた。

奸算

だが、ソーンはそれくらいではへこたれない。

「あ奴らは、みんな金髪碧眼なんだよ。あんた一人なのか？」

「見れば分かるじゃない……知らない世界にいきなり放り出されて、迷惑もいいトコだわ」

腰に片手を当てて憤懣露わに言う彼女に、ソーンは密かにほくそ笑む。

（お、いきなり当たりか！？）

「じゃ、アンタが17年ぶりに帰還した姫か」

「なんのことか分からないわ。それにあたし……貴男の名前、知らないんだけど」

まくし立てて身を乗り出したソーンに、エヴァは気味悪そうに肩を抱く。

警戒して後じさり、じりじりと離れつつある彼女にソーンは苦笑いした。

「ま、いいや。俺はソーンだ、アンタは？」

「……エヴァ」

ソーンは暫く食い入るようにエヴァを見つめると、やにわにその髪に触れた。

「……綺麗だな。こんな近くで見るの、初めてなんだ」

「そうなの？ 貴男のは火みたいに真っ赤な髪ね」

「柔らかい。エヴァのは小鳥の羽みたいだ」

節のない、長い指先が何度もエヴァの髪を梳いた。

きょとん、とされるがままのエヴァは、無垢な目で静かにソーンを見つめている。

（コイツ…無抵抗だ。警戒してるが、俺を恐れてる風でもない。取り敢えず、利用するにはもってこいだよな）

「なあエヴァ、お前…国には戻らないのか？」

「国ってなあに？」

いくらか警戒が緩み始めたのか、彼女の言葉の角がおちた。それをソーンは見逃さない。

「アストライアの首都はイルダだろ。そこまで連れてってやるよ。俺も、そこに用があるんだ」

「まだ、この世界のこと…なんにも知らないのよ？　なんだか、いや」

「知らないなら、俺が教えてやる。憶えるのも、案外楽しいモンだぞ？」

「そう…かな？」

恥ずかしそうにはにかんだエヴァに、ソーンの心臓がおかしな風に跳ね上がる。

（ヤバ…コイツ、すげえ可愛いじゃねえか）

「そ、それに…なんつーかな、お前のこと、気に入ったし」

「え？」

エヴァの顔に、動揺が浮かぶ。

「イヤか…？」

精悍な顔を触れそうなほどに近づけてから、ソーンは叱られた子犬のように頂垂れた。

「イヤじゃ…ないけど」

「そっか！　よしよし、なら今から友達だ」

「きゃ…」

思いきり抱き締められて、エヴァは蒸気を噴いた。

じわじわと、黄昏を闇が浸食してゆく。

夕闇が海を染める前に、エヴァはソーンを連れてねぐらである岩窟

を案内することにした。

おそらく、以前は何らかの獣が使っていたのだろう。

内部は表から見るとよりは存外に広く、岩盤は滑らか。

そして、寝床らしい窪みには干し草の類や綿、羽毛などが敷き詰められている。

「これ、お前一人で集めたのか？」

羽毛の一片を抓んで呆気にとられた風のソーンに、エヴァはどこか嬉しそうに応えた。

「そうよ、あたし一人で集めたの。柔らかくて寝心地がいいでしょ」

確かに寝心地はよかった。

巣作りをさせたら、右に出る者はいないかも知れない。

（すつ、巣作りつて、俺なに考えてんだよ！）

人狼は、基本的には人間と変わらない暮らしをしているので、そう言うことは万に一つなければしないことだ。

する場合は、隠遁か逃避行の時だけに限られる。

ぼうつと妄想していたソーンを、エヴァのやや不機嫌な声が殴りつけた。

「なにぼうつとしてんのよ、黙ってないで手伝って」

火打ち石が何度もかち合わされて、流木の上に細かな火花が散っている。

殴打するためか、透ける白さの柔手が所々擦りむけて痛々しい。

「やめろって…痛いだろうが。なんで力を使わない」

「だから、力ってなに？」

火打ち石を雀り取られて、エヴァは思いきり顰め面をする。

「そうだ……人間は魔術が使えないんだっただ。仕方ない、見てろ
イグニス・ファットウス！」

ゆらゆらと塵気楼のように、ソーンの右手から朱色の球体が生み出された。

そして、間をおかずに球体は火柱となる。

「ソーン、火傷しちゃうつ！ソーンってば！」

焰は舐めるように流木を絡め取ると、あっという間に燃えあがった。

「これでよし、次はどうするんだ？」

振り向いたソーンは、ぎょつとして一瞬だけ動きを止めた。

エヴァが、一抱えもある岩盤を引っ張ってきたからである。

「食べ物なら、ちゃんとあるわよ。持ってくるのにかなり苦労したけど」

「つーか、デカ過ぎだろうその岩盤は」

「見てっ」

誇らしげに取り出した卵は、西瓜ほどもある大きな物。

アルピーエ
「地獄鳥の卵っ！？」

「あの鳥、アルピーエっていうの？」

「どうやって持ってきたんだよっ、アイツら凶暴で有名なんだぞ？」

まるで盗んできたかのような言い方にカチンときたエヴァは、きつくソーンを睨みつける。

「言っとくけど、盗んだんじゃないわよ。頼んだんだからね」

「はあ！？もっと有り得ねえよ！」

【地獄鳥】ことアルピーエ。

三本足の猛禽類。性質はきわめて凶暴と言われ、その主たる食物は海獣などである。

全長約2メートル。

蘊蓄と説明を続けるソーンに再びイヤな顔を見ると、エヴァは素焼きの皿を鼻先に突きつけた。

「ちつとも手伝ってくれなかったわね、それに……彼はそんなに凶暴じゃないわ。友達なんだから」

「ひええ……アルピーエを手なずけやがった」

「昔から、動物には好かれる質なの。冷めないうちに食べたらどう？ 美味しいわよ」

「あ、ああ」

素焼きの皿を受け取ると香ばしい匂いが鼻を攪り、ソーンはいそいそと匙をつけた。

「……美味いつ」

「でしょう！ 今まで料理なんてしたことなかったんだけど、誰かに『美味しい』って言われると嬉しいものね」

無邪気に喜ぶエヴァに、ソーンはあつという間に毒気を抜かれてしまっていた。

（いや、俺は近いうちにコイツを殺すんだ。その為に傍で仲間のフリをしている）

絆されてはいけない。

ボレアスの時期長である自分にとって、それだけはあつてはならないことだ。

「どうかしたの？」

「別に、なんでもない……」

真つすぐに見つめる碧眼に、ソーンは居心地悪そうに身じろぎした。

「食べ終わったら隅に寄せといて頂戴ね、片付けるから」

「どこ行くんだ？」

洞窟を出ようとしたエヴァを呼び止め、ソーンは実にさりげなく後ろ手で刀を抜いた。

「洗濯物取りに行くの、雨が降りそうだからね。手伝ってくれるのかしら？」

「あ？ ああ……まあな」

刀を収めてしまってから、ソーンは内心で頂垂れる。

（チツ……俺のバカ）

さくさくと、砂を踏む音が黄昏の浜に響いている。

洞窟を出て坂を下った場所に、色褪せたランニング・シャツが掛かっているのが見えてきた。

「これ……全部作ったのか？」

古びて綻びのある布地でできたそれは、穴を開けただけだというのに大層立派な作りをしている。

「だって、着る物がなかったんだもの……そのままじゃいられないわ？」

微笑むエヴァに一瞬見惚れてしまい、ソーンは頭を振った。

草染めのスカートを翻して道を下っていくエヴァを、ソーンはいつまでも睨みつけていた。

自分の出生も、仲間さえも知らない赤ん坊同然の敵の姫。一体、どういふつもりだろう。

恐れを知らないだけなのか、それとも……侮られているのか。

このまま殺してしまうのは容易いことだが、それでは面白味がない。味気がない。

（このまま見張ってみよう、アイツがどう動くか）

エヴァを屠る手立てなら、幾らでもあるのだ。

深緑の瞳を細めて、ソーンはくつくつと昏く笑った。

萌芽の鼓動（前書き）

種族を隠してエヴァと共同生活を始めたソーン。
エヴァは彼の目論見に、まだ気づいていない……。

萌芽の鼓動

「なあ、嵐が止んだら街に行こう」

チリチリと薪が爆ぜて、洞窟内を夢のような緑青色に照らしている。炉端の傍らで寝そべって、ソーンはエヴァの髪をいじり回しながら言った。

「ダメよ……そんなお金持ってないし。前から不思議だったんだけど、あたしも知らない家族のこと……どうして知ってるの？」

怪訝な表情をして見つめるエヴァに、ソーンは思いきり言葉を詰まらせた。

（しまったぁ……まさか今ここで正体をばらす訳にはいかないし）

「この国で、王族を知らないヤツなんかいないぜ？ 自分の仲間の所に、戻りたくないのか？」

「よく分からない事ばかりだね。あたしは、その『王族』とかいうものの？ ソーンは？」

小さな子供のように知りたがるエヴァに、ソーンは小さく肩を竦めて話し始めた。

「俺は、ただの根無し草だよ。親もいなければ、仲間だっていない……」

（そうだ……今ここではらす訳にはいかない。俺の将来のためにも）

「でも、今は違うじゃないの」

「は？」

それで話を終わらせたつもりでいたソーンは、ふいに微笑まれて酷くばつの悪い思いをした。

「だってそうでしょ？ 今はあたしがいるんだし、少なくとも独りじゃないわ」

「……フン」

再び微笑んだエヴァに毒づいて、ソーンはエヴァがいる寢床の反対側に丸まった。

（騙されるか……色仕掛けたって、そうはいかない）

ころころと転がりながら、ほんの少し躊躇いがちに後ろを振り向く。彼女が敵意をなくしたのは明白で、先と変わらぬ表情をこちらに向けていた。

「……なんだよ……」

痛いほどの視線に（エヴァは特に見ている訳ではない。彼が自意識過剰なのだ）、遂に堪らなくなったソーンは恨めしげにエヴァをねめつける。

「ソーンって、誰にも懐かない子犬みたい」

「こ、仔犬う！？ ひでえよエヴァっ」

人差し指を立てて無邪気に言うエヴァに、ソーンは仔犬よろしく噛みついた。

「犬じゃない、狼だ」

「どっちでもいいじゃない、そんなこと」

小さく欠伸をして、エヴァは寢床の中に鼻先まで潜り込んだ。

「もうおやすみ、明日も早いわよ……ううん」

「なんだ、人のことを好き勝手言いやがって。勝手に寝るなよ……言い逃げかよ」

ぶつくさ文句を垂れつつエヴァの傍ににじり寄る彼自身も、既に警戒をなくしている。

尤も、本人はまだ警戒しているつもりだが。

「お前、ほっとけないから監視だ。傍で見てるからな」

鼻面を寄せて呟いた彼は、燃えるような赤毛を持つ狼になっていた。人狼は人獣両方の性質を持っている。咄嗟の機転が利くので、こういう時に便利だ。

ソーンは『伏せ』の姿勢のまま、目を閉じた。

だが、完全に閉じたりはしない。

轟々と大地を抉る風に耳を澄ましながら、隣に眠るすっかり油断し

た愚かな獲物を殺す瞬間を夢見て、ソーンは限界のない想像を膨らませていた。

転落 愛は螺旋のように（前書き）

葛藤の末…ボレアスの少年・ソーンとの恋に、エヴァは…？

転落 愛は螺旋のように

目が覚めてソーンが始めに聞いたのは、やや間を置いて聞こえる海鳥の声だった。

「ん……エヴァ？」

やや寝ぼけた響きの声が、広い洞内に^{こだま}飮して耳を暫く狂わせる。隣にエヴァの姿はなく、有るのはただ冷たい寢床だけだ。

「逃げたのか？」

蚊の鳴くような声で呟いて、ソーンはひとしきり欠伸をした。

「くそう……今日こそ駒を進めるぞ。これじゃ埒があかねえ」

誰もいないのをいいことに、ソーンは堪りに堪った鬱憤を吐き散らかす。

「どこ行つたんだ、アイツ 戻つて来次第、引きずつてでも街に連れてくのに」

（つたくあいつ、自分の立場がちつとも分かつちやいない！）

歩調荒く洞窟を出ると、坂を下り砂浜に行き当たる。

そこで、ソーンは己の目を疑う光景を見た。

脱ぐ散らかされた服、靴。

そして、白磁の肌と金髪を持つ少女。

「あら……ソーン、起きたのね」

魚の刺さった銚を片手に振り向く、彼女の白い双丘がふるりと揺れた。

ソーンは凍り付いたように、それから目を動かすことができずいた。

「あら……」

白砂の上に、赤い飛沫が散る。

状況把握に手間取ったソーンは、すっかりエヴァの裸身に魅入って

ってしまったのだ。

暑さで視界が定まらないのに、目が離せない。

いや、離したくない。

この世で一番綺麗な物を見た気がして、ソーンはとても満たされた気分だった。

ソーンの体が、ゆっくりと弧を描いて倒れていく。

「もう。なにやってるの……ほら、お水。わざわざ河口まで行って汲んできたのよ」

「ハハ……わりい、みとれちまつてた」

「スケベ。あんたにお水なんかあげないんだから」

木陰に横たわるソーンの傍らで、エヴァは水の入った椰子の殻を抱えている。

もちろん、今は服を着て。

「そう言いながら、飲ませてくれるんだな……」

怠そうに笑うソーンの口許に再び器を宛てがってから、エヴァはぷんと頬を膨らせた。

「目の前で苦しんでる人を、放っておけないでしょ？ そんなの、人でなしのする事よ」

（ハハ……やっぱり綺麗だ。俺、イカれちまつたかな？）

目を逸らすソーンの頬は、上せのせいかな、はたまた別の原因なのか髪の色と同じくらいに真っ赤になっていた。

二人の瞳の、深緑とサファイアが絡み合う。

「お前、やっぱり綺麗だな……」

「よく分からない、あたし綺麗なの？」

「ああ」

月光の様に淡い金髪は細く、一本ずつが滑らかだ。

ゆっくりと柔らかな風が、二人の間を吹きぬけていった。

「貴男、不思議なヒト」

「お互い様だろ……」

まだ出逢って日も浅いというのに、二人を隔てる壁

種族や、

懐疑心などが短時間で脆く崩れつつある。

ソーンは密かに殺意を抱きながらも、無垢なエヴァに興味を持った。やがて殺し合うことになるかと分かっていながらも、それでも尚、エヴァに触れたいと思ったのだ。

「街に行くのが不安なら、俺が護ってやってもいいぞ」

「ボディーガード？ それは嬉しいけど、こんな成りじゃ街に出られないわ。服を買う余裕もないし」

「余裕なら、出来るかもな。さっきそのアテを見つけた」

「アテって… お金になる物なの？ 服代だって、バカにならないんじゃない」

「いいから、四の五の言わないで付いて来いって」

楽しむような調子に言って、エヴァの手を引く。

「どこ行くのよ、そっちは砂浜しかないわ？」

「いいんだよ、こっちで。岸边をよく見てみな」

一頻り引っ張って行かれたエヴァは、不思議そうに周囲を見回した。

エヴァは光を巻いて碎ける波打ち際、濡れた砂の上に
な物を見だして拾い上げる。

透明

それは、譬えるなら透明なゼリービーンズ。

だがしかし、それは石のように固かった。

「ソーン、なにかしら…この透明なの」

「綺麗だろ、嵐の翌日には必ず浜に揚がるんだよ。ウンディーネっていう、生きている石だ」

「紫もある……アメジストみたい」

半ば砂に埋もれたウンディーネを拾い上げて、エヴァは光に透かしてから頬に引き寄せる。

「アメジストってなんだ？ 食い物か？」

ひょっこりと、身を乗り出して尋ねる仕種がおやつをねだる犬のよう
うで、エヴァは不謹慎にも我慢できずに嘔き出してしまった。

「なっ、なんだよっ」

当然、笑われた本人は理由不明の屈辱を味わう羽目になってしまい、
頬を染めながら返事を待っている。

「ご、ごめん…なんだか可笑しくて。アメジストは紫色の水晶のこ
となの」

「……紫色の水晶。まあいいや…とにかくウンディーネを拾って市
場に行くぞ」

肩を竦めてみせると、ソーンは小さな麻袋を一つエヴァに手渡した。
「これで10000ケアルにはなるだろう。これが三袋あれば当分
の旅費になると思うぜ」

1ケアルを一円として換算すれば、10000ケアルで一万。

30000ケアルで三万という寸法だ。

ちなみに、この国の物価は安い。

だが、特に質が悪いという訳でもなかった。

その原因というものを述べるなら、この国が豊かであることが絶対
的な理になる。ことわり

「そうね、たくさん集めておかなくちゃ」

「紫色のは袋に入れるんじゃないぞ、値段が下がる」

「綺麗なのに……どうして？」

拾いかけた紫の石を砂地に戻して、エヴァは少し離れた場所で石を
集めているソーンの傍に駆け寄った。

「そりゃ、死んでる石だからだよ。しかも長く持ち続けると水を呼
ぶ」

「雨とかかな？」

「そんなのならまだマシだ……洪水を呼ぶって言い伝えられてるん
だよな。それ」

洪水に流される自分を想像して、エヴァは青くなる。

それだけは、なんとしても嫌だった。

「それは嫌だなあ……あたし雨降りは大が付くくらい嫌いな」

「じゃ、入れんなよ」

「うん」

片言のやりとりが、暫く続いた。

ソーンはすっかり自分の役目を忘れて、エヴァに夢中になっている。本来なら油断を見つけ次第に殺さなければならぬのに、ソーンはそれ自体を忘れてしまっていた。

「洞窟を出る気になったんだな、なんでだ？」

ウンディーネを4袋分拾い集め終え、洞窟へ戻る道を歩きながらソーンが問う。

「いきなり放り出されたから、取り敢えず住んでただけ。お金ができるのなら街へ行くのが筋じゃないの？」

思いきり金持ち思想を振りかざすエヴァに、ソーンは内心で疑問を膨らませた。

（エダインで、随分と裕福な暮らしだったみたいだな……）

「まあそうだけどね。聞いてもいいか？ お前、エダインでどんな生活してたんだ？ 人間に飼われてたんだろ？」

「飼う？ 違うわよ、犬じゃないんだから」

「人型でいられる筈はないと思うんだが、人間の姿だったのか？」

「初めからそうだけど。それがどうかしたの？」

なぜ次元の違うエダインで人の形をしていたのか分からず、ソーンは困惑を隠せず思わず身を乗り出す。

「信じられねえよ、エダインじゃ……俺たちは力を抑えられて獣の姿になるはずだ」

「そうは言っても、あたしは始めから人間だったのよ。こっちに來ても獣の姿になんてなったこともないわ？」

「お前にはなんだか込み入った訳がありそうだな……尚更街に行く理由ができた」

ニヤリとしたソーンは、エヴァを腕の中に閉じ込める。
一瞬のことだった。

唇には柔らかな感触と　目の前には綺麗な深緑の瞳。
するりと、細かな砂地の上に麻袋が落下した。

「な……なにをするの、離して」

「いやだ。　もう、お前に決めたんだよ」

「……決め、た？」

少し震えて上擦つわすったエヴァの声が、更にソーンを発情させる。

「ああ決めた。エヴァはもう俺のもの」

可愛い、俺の獲物だ。

他になんて、絶対殺させやしない。

最後の瞬間をくだすのは、自分だけに許される。

「やだ、なに口説いてんのよ……あたしは、嫌よ。こんな強引な」
依然抱き締められたままで、エヴァは憤懣ふんまん露わに唇を尖らせた。

「それなら、靡かせるまでだな」

「嫌いっ、嫌いよ！　アンタどこまで強引なのっ」

抵抗しようと暴れるが、小柄なエヴァはすっぱりと抱きすくめられていて身動きが取れない。

「嫌いなんて、言っなよエヴァ。なあ……」

「や……やめて……」

再び、唇が迫ってきて触れる。

「守ってやりたくなっただよ、お前が」

「え……」

エヴァの頬が、先とは違う風に赤らんだ。

（コイツを手籠めにするのも……仕事の内だ）

「帰ろう。明日には洞窟を出るんだから、今日中に仕度しろよ」

落ちた麻袋を拾って、ソーンは微笑む。

「え、ええ……」

（こりゃ、完全に堕ちたな）

夕餉を食べながら、あからさまにエヴァの様子は可笑しかった。

目を合わせようとせず俯いたまま匙を進め、そそくさと洞窟から出て行ってしまった。

「少し冷えるわね……月が綺麗」

月光が、砂を淡く染めている。

冷たい波に足を洗わせて波打ち際に暫く佇んでから、エヴァはゆっくりと歩き始めた。

まるで、洞窟から離れんとするかのよう。

どのくらい、歩いたのかは分からない。

もう洞窟は見えなくなってしまった。

果てなく続く砂丘を、エヴァは泣きながら歩いていった。

『誰かを好きになる』ということが解らないのだ。

どんな顔をして、ソーンの顔を見たらいいのか解らない。

考える度に、あの強引なキスが思い出されて涙が出る。

譬えようのない思いに、五体が引き裂かれるようだ。

恥ずかしくて死んでしまいたい気分^に幾度もなり、遂にエヴァは波打ち際に走り出す。

考える度に苦しくなる、痛くて堪らない。

もう、なにも考えなくなかった。

「エヴァっ……！」

強い声^{つよ}に、エヴァは壊れた人形のように振り向く。

そこには肩で息をしながら、ソーンがいた。

「なにやってんだよ、お前は」

なりふり構わず駆け寄り、暗い海からエヴァを引き出したソーンの目は危険なほど怒りを湛えていた。

「苦しいのっ、どんな顔をしてアンタを見たらいいか解らないのよっ…もう、引き裂けてしまえそう」

崩れ落ちたエヴァを再び立たせてやり、ソーンは背中を支えた。

「その目だよ、そのまっすぐな目で俺を見てくれ…もう、泣くな」
「なによ、あんたが泣かせたんじゃない」

だが…エヴァは、その先を紡ぎ出すことができなかった。

「やつ…やん　んっっ！」

突然反転した視界。そして、逞しい腕。

先より激しいキスに、エヴァの力が抜けていく。

「なに、するの…よ」

ようやく離れた二人の間に、唾液が銀の糸を引く。

こんな状況だというのに、気丈さを失わないとは…とソーンは苦笑した。

「睨むなよ、俺が嫌いか？」

「言わなくなつて、解るでしょ……」

返した彼女の声には、もう覇気はない。

つまりは否定の意なのだ。

「お前のためなら、死んだっていい。ホントだぜ」

「バカ……死んだら元も子もないのよ…？」

「お前が言うなつての…」

ニツと笑うソーンの唇に、今度はエヴァがキスをした。

「……好きよ……」

驚いた表情のまま見事に固まったソーンに、エヴァは誰にも見せたことのない、花が咲くように笑った。

砂の上に脱ぎ捨てられた二人分の服が、月光に青く染まっている。

その向こうには、生まれたままの姿で愛し合う二人の姿。

叶わない『愛』だと解っている。

けど、惹かれ合った。

もう誰だって、自分たちを止められない。

愛撫を受けるエヴァの白磁の肌が、薄紅に染まる。

「泣くな……エヴァ……」

遅しいソーンが、再びエヴァを包み込んだ。

「ずっと傍にいる……約束だ」

「……ホントね、嬉しい……」

共に昇りつめ、辛うじて意識のあるソーンは、気を失ったエヴァを片腕に抱いて深く溜息した。

「やべえよ、俺……こいつを好きになっちまった」

一族の希望だといった父の言葉を、裏切ることになるのは明白だ。ボレアスにも戻れないだろう。

けれど、それでも悲しくはなかった。

「親父達はお前を狙ってくるだろう。けど、俺だけは見方だぜ」

護るべき者ができる喜び。

ソーンは、ふといつか遠い日に母親が言っていたことを微かに思い出した。

『人は、誰かを愛して……愛されるために生まれてくる。決して、争うためじゃない。護るべき者ができたときは……全力で護りなさい』

「分かってるさ。当たり前のことだ」

エヴァを抱き締めながら、ソーンは永久を誓う。

残酷な愛と現実（前書き）

本来ならば敵同士の種族である、エヴァとソーン。

だが、それさえも越えて2人は惹かれあつた。

運命の上で流転する、残酷な愛に翻弄される二人が辿る道とは
！？

残酷な愛と現実

「……エヴァ……？」

未だ夜も明けない薄ぼらけの中、ソーンは異様な寒気を催して跳ね起きた。

夢を見たのだ。

エヴァが、自分の前から消えていなくなる夢を。

生涯を誓い合ったばかりなのに、なんて夢見が悪いのだろう。

夢のせいなのかどうか真偽のほどは分からないが、歯の根がかち合
って悪寒が止まらない。

どうしても悪い方向へ考えそうになる自身を奮い立たせて、ソーン
はいそいそと辺りに散らばっている服を引っかける。

その頃……ソーンの心配も余所に、エヴァは河口の畔で髪を梳いて
いた。

ふと首筋に紅い痕があるのが水面に映り、エヴァは昨夜を思い出し
てしまい、思いきり赤面する。

昨夜、晴れてソーンと結ばれた。とてもとても満たされた、幸せな
気分だ。

本当に夢のようで。でも少し動く度に内臓が痛むので、それが夢で
はないことが改めて実感できる。

「夢じゃないんだわ……うふっ」

「『うふ』じゃねーだろ。…搜したぞ」

「ソーン、おはよう」

無邪気に飛びついてきた恋人に、ソーンはやや脱力気味に返事を返
す。

「だーって、嬉しいんだもん…」

「早く仕度しろ、出かけるぞ」

「解ってるわよ、ちよつと待って」

エヴァは、爪先立ってソーンの曲がった衿を直して微笑む。

「はい…これでいいわ」

「あ、ありがとう」

淡い金髪が流れて、彼女の首筋に昨夜の痕があるのが露わになった。

「行くぞ、砂に足を捕られるな」

冷えた外気に、紅く染まった頬がぴりりと痺れる。

「これくらい平気だってば」

海を過ぎ、砂丘を越え。

二人は今、火炎野フレグライと呼ばれる砂漠地帯を歩いていた。

ブレグライの別名を『禁断の地』という。

砂漠とは名ばかりのもので、本当はただの砂地だ。

「ソーン、ここ……禁断の地って言うのよね？ なぜ？ どう見て

もただの砂地でしかないでしょ？」

「いや、うん……そうなんだけどな」

ソーンにも名前の由来は解らないが、集落むにいた頃に族長が話していたことを記憶の端切れからやつと引っ張り出して思い出した。

【彼の地に近づいてはならぬ さもなくば命を落とすだろう】

「砂漠だわ……ちつとも暑くないけども」

呟いたエヴァに、ソーンは沈んだ表情のまま口を開いた。

「よく解んねえけど、あんまり近づくなって意味じゃないのか？」

「その割には、なんにもない場所。来ちゃいけない場所なのに……全然危なくないのね」

「いや…首都に行くには必ず通る、危険な道だっていわれてる」

「……ふうん……」

「エヴァ、止まれ」

「え？」

「いいから、動くんじゃない」

ソーンは背にエヴァを庇うようにすると、腰の剣に手をかけた。
ソーンは聴いたのだ。
洞を通した風のような、独特の遠吠えを。

^{おそ}悍ましい声は次々に仲間を集め、数を増していく。

「なに、何なの……この声」

怯えたエヴァが一頻りに震えながら呟いた。

「グールだ、闇より出でしもの」

グールは全体的に灰色の毛皮に覆われ、ハイエナに酷似する妖魔だ。
爛々と光る目は赤く、耳元まで裂けた口の端からは唾液に^{ぬめ}統る紅い
舌が垂れている。

どこかで屍肉でも喰らってきたのだらう、血だらけの尖った鼻面が
牙を剥いて迫ってきた。

「いやっ、いや っ!!」

突如、エヴァの脳裏に残像が明滅して消えた。

炎の中、引き離される母子。

炎を映した、血塗れた白刃の閃き。

深緑の瞳に、そして紅い

炎より紅い髪。

赤い華が咲いた。

脱力して膝を突き、がくりと頂垂れたエヴァをグール達の唸りが取
り囲む。

「くそっ……きりがねえ！」

イグニス・ファットウスっ！」

襲いくる妖魔・グールを火炎魔法で撃退してふり返ったソーンは、
エヴァの異変にその身を凍らせた。

「愚かな、私に逆らうなど……」

彼女を取り囲む唸りが、ひととき高くなる。

冷え切って凍った瞳は、彼女がエヴァではないことを象徴し、エヴァの姿をした『少女』は顔色一つ変えずに殺傷魔法を厳かに呟いた。

「闇から出でし者共よ、^{すべから}須く永久の眠りを与えよう。燃やし尽くせ
フェアノール」

間髪入れずに、少女の掌が業火を噴く。

ごっ…と火の粉が舞い上がった。

断末魔を上げながらもがき、グール達が燃えていく。

「エヴァじゃない……お前は何者だ!？」

「子供、人に名を尋ねるならばまず貴様から名乗れ」

凍り付いた瞳に睨まれて、ソーンは固まった。

「ソーンだ……本当に、憶えてないのか？」

「知らん。私の名は星の乙女^{ヴァルダ}という……」

ぐらりと倒れた少女はそれきり起きあがることはなく、ソーンは慌ててエヴァを揺り起こした。

「エヴァ! エヴァ、起きろ……起きろって」

「……う……ん？」

ソーンは、目を覚ましたエヴァに安堵しながらも、先刻現れたヴァルダと名乗った人物を思い出していた。

恐ろしく冷たい目をしていた。

まるで、全て凍ったような感じた。

「ソーン？」

「エヴァ、どこも何ともないか？」

「うん、なんともな……きゃ　っ!」

そこまで言いかけたエヴァは、目の前に転がる燃え尽きた妖魔の残骸に慌てて後じさった。

「なにこれっ……まさか、ソーンがやつつけたの？」

顔面蒼白で問うたエヴァに、ソーンはわざと大仰に溜息する。

「色々大変だったんだぜ? お前は気絶するし」

不安がる彼女を、徒に怖^{いたずら}がらせることもないと判断したのだ。

「ごめん……」

「んな顔するんじゃないって」

叱られた仔犬のように頂垂れるエヴァを抱き寄せて、ソーンは曖昧

な激励をした。

それしか、方法が見付からない。

ヘタなフォローは彼女を更に傷つけてしまうだろう。

「ほら、行くぞ。のっけからこんだが…道は開けた」

「うん」

頬を撫でる手に目を細め、エヴァは今のささやかな幸せを噛みしめていた。

地図ではあつけないほど近く感じるが、はっきり言って街まではかなり遠い道程になる。

「悪い、ちよつと離れててくれるか？」

「分かった」

まるで子栗鼠のように、ぴょんと腕の中から飛び出すエヴァ。

「Shadow」
シャドウ

柔らかな中音が、大気を攪拌する。

見守るエヴァの傍で、ソーンの赤毛が黒く染まっていく。

「綺麗な赤毛なのに、隠しちゃうのは勿体ないわよ」

「目立ちたくないんだ、色々と……」

（護身だ……正体がばれたら殺されるだろうから）

「ふうん？ 黒髪のソーンも素敵だけど……」

無邪気に微笑む恋人の心遣い。

本人は特にそんなつもりはないのかも知れないが

なにより

身に沁みて嬉しかった。

「……ありがとな」

「なにが？」

「いや……いい」

「変なソーン、置いてっちゃおうかしら？」

「いや、ひどいなエヴァ」

「それにしても、なんて広いのかしら。なんていうの？ ひどく

寂しい感じ」

耳を澄ませば、風は遙か古えの慟哭を運んでくる。

そして 砂に紛れる、数え切れない白骨の山。

断末魔の、悲痛な叫び。

エヴァには、それらが見え、聞こえていた。

「たくさん死んだのね……ここは古い霊場なんだわ」

「エヴァ？」

目を閉じて合掌するエヴァに、ソーンは怪訝な顔を向けた。

「なに、してるんだ？」

「ここに眠る人たちに弔いをもっと……」

手を合わせるエヴァの周りが、その時だけ音をなくす。

エヴァの耳は、過去のあらましの全てを聴いた。

この地では、過去に大規模でそれは惨い戦があったのだ。

住民をも巻き込んだ、戦火の渦はあつという間に土地を焦土に変えた。

記憶を辿るだけなのに、鮮明に伝わってくる戦場の匂い。

生き物が灼ける焦げた匂いと、夥しい血の海。

折り重なる、体の各部分の欠けた死体の山。

多種族入り乱れての殺し合いでは、老若男女関わらず幼子でさえも命を奪われた。

「可哀相……なんてひどい。たくさん殺されて死んだ、魂は未だここで苦しんでるのね。だからここは『禁断の地』なんだ」

「何だよ……お前まさか、見えるのか？」

「そうみたいね、早くここから移動した方がよさそう」

砂地から伸ばされた亡霊の腕を振り払い、エヴァは啞然としているソーンを追い越して足早に歩き出した。

「ま、待てよ！」

小走りに駆け寄るソーンは、青褪めた顔で追い縋る。

よほど、エヴァの話が堪えたらしい。

「ダメよ、怖がっちゃ。行こう」

砂丘を降りて去っていく二人を、『なにか』が見ていた。

まるで隠者のように色褪せた外套を纏った人物は、鋭いアイズブル
ーの瞳を更に細めて小さく、そして短く呟いた。

「見つけた 間違いない」

風が、砂丘の砂を洗って砂紋を描く。

一頻りの風が止んだ後、彼は追跡を開始したのだった。

ソーン、死す！（前書き）

人狼族：セピュロス側の姫であるエヴァは、敵族のボレアスの少年・ソーンと恋に落ちたが、世間がそれを許すはずもなく。二人：特にソーンに鉄槌がくだされた！

ソーン、死す！

火炎野を抜けた二人は、数ある街の中でも最も辺境に位置する、スルトという街に辿り着いた。

乾いた褐色の道には轍の跡が深く刻まれ、石化して崩れかけている。栄養分の少ない土地なのか、白茶けた地面が続く。

「誰かいなかしら……喉が渴いたわ」

「どうやら、未だ町外れみたいだな……中心へ向かうぞ」

石畳の階段を下って二件ほど先に行った場所に、崩れながらも僅かな水を迸らせる噴水があった。

おそらく、ここが街の中心なんだろう

ほぼ廃屋と化した商店

店が広場を囲んでいる。

「おかしいな。地図にはちゃんと街があるって書いてあるのに……」

「この街は100年前に廃墟となった。そんなことも知らないのか、小僧」

地図と睨めっこをしながら歩いていたソーンは、街の出口を出かかった瞬間に鋭い殺気を感じて飛び退いた。

「誰だ！」

「貴様から名乗れ……礼儀のない」

「ソーン。お前は！」

「ギル・ガラド……勅命に従い、姫を迎えに来た」

背後でエヴァが後じさったのを感じて、ソーンは腰の剣に手をかける。

「髪の色を変えても、気配だけは誤魔化せない。ボレアスの若造め……姫は欺けてもこの俺を欺くことは不可能だ」

…… 姫は欺かれてもこの俺を欺くことは不可能だ」

すらりと抜かれた長刀が、白光を宿して伶俐に閃いた。

ギルは長身の男だが、彼の愛刀はそれを超える長さがある。

「エヴァは渡さないっ……」

「ほう、やるのか小僧」

面白い、と嗤^{わら}ってギルは地面に刺していた刀を抜く。

「先に逃げるエヴァ、俺はコイツを片付けてから行く」

「で、でも……ソーン」

「心配ない、さっさと行け！」

まごつくエヴァを叱咤して、ソーンはまっすぐに目の前の敵を睨みつけた。

「ボレアスの小僧……貴様、王都に向かうつもりだろう」

「コイツを届けるだけだ」

「その必要はない……俺が姫の迎えだからな。貴様には、ここで死んで貰おうか」

「なんだとっ」

「勅命だ……王は全て見通しておられる。姫を唆^そした輩を殺せとも仰った」

「くっ……！」

「どうせお前は捨て駒だ、ボレアスに戻っても仲間に裁かれるぜ」

「うるさい、俺はエヴァを護りたいだけなんだっ」

不敵に口角を上げる彼に、ソーンも負けじと睨み返す。

だがその通りだった。もう二度と、ボレアスには戻れない。

「さあ選べ、今ここで殺されるか……我らの捕虜となるか」

「……どっちも却下だ！ 俺はエヴァを護るっ」

距離をとってから、切っ先を向けて激昂するソーンに、裁定者は深々と溜息をついた。

「頑迷だな……姫が泣くのは見たくねえが、貴様には死んで貰おう」
なに、と踏鞴^{たたら}を踏んだソーンの身体は、立ち直ることなくそのまま墜落した。

ざくり ……と小気味よい、肉を断つ音。

生暖かい、血潮が噴き上がる。

ソーンの胸郭を、ギルの愛刀が貫いていた。

「がっ……あ……あっ」

肺を伝った血液が、泡に混じって口許を汚す。

「私情は挟むまいと思っていたが……よくも俺の許嫁を誑かしたなっ……」

ギルはもがき苦しむソーンを見遣り、殺意と憎悪をない交ぜにした目を鋭く細める。

「俺は、死なない……アイツに、必ず行くと約束……げほっ、げほ」
「そこまで言ったソーンは、激しく噎せて夥しい血糊を吐きだした。
「哀れだな。だが当然の報いだ……約束は代わりに俺が果たす」

「てめえ……」

「ふん、その目……俺の左目を抉ったお前の父にそっくりだ」

もう抵抗できなくなつたソーンを認めて、ギルは彼の背に刺さつた愛刀を抜き去つた。

「かはっ……!!」

血と油で霞んで見えない目から、はらはらと涙がこぼれ落ちる。

崩れ行く意識の中、ソーンは一人先に逃がしたエヴァに思いを馳せた。

もう行く宛のない自分は、ここで死んでしまうのだろうか。

愛する者さえ、ろくに護れない自分。

なんて愚かなんだろう。

いや　もういつそそれでもいいかも知れない。

辛うじて笑いで引き攣らせた血で汚れた口許を、新たな血糊が伝い堕ちていく。

「エヴァ……悪イ」

霞んで定かでない彼の視界は、今度こそ本当に闇に包まれた。

音もなく降り出した雨が、白茶けた大地に朱を滲ませている。
敵であるセピュロスの娘に恋い焦がれたボレアスの斥候は

天を仰いだまま絶命していた。

「雨か……ソーン遅い」

エヴァは戻りの遅い恋人を待ちながら、雨を落とす鈍色の空を見あげていた。

それにしても、遅すぎではないだろうか。

すぐ来ると言ったが、すぐとはどのくらいだろう。

「ソーン……」

「奴はもう来ない」

呟いて、探しに行こうとしたエヴァは、手首を掴まれて慌ててその主を見た。

「え？」

「お捜し申し上げた、姫……俺、いや私は貴女の迎えを仰せ遣ったギル・ガラドと申します」

「迎え……？ それよりソーンはどこ？ 来ないって、どうして？」

「あの小僧は死んだ」

そこだけ、恨みが籠もって口調が素に戻る。

「嘘、嘘でしょう……？ どうして、どうしてよ……約束したのに、絶対だって……」

詰め寄ったエヴァの肩をやりわりと抱き締めると、ギルは深く思いやるような声音で残酷な真実を告げた。

「あの少年は、私が成敗しました。姫、彼は敵の斥候兵だったんです」

エヴァの視界から、色彩いろが消えた。

嘘だ。

これは、質の悪い嘘に決まっている。
そうに違いない。

ソーンが死んだなんて。

「やめて…嘘よ、ソーンが死ぬはずない。一生傍にいるって約束したんだから！」

ギルの腕を払って、エヴァは涙の溜まった瞳で彼を睨みつけた。

「…嘘じゃない、息を引き取るのをこの目で見届けた」

「やだ…離してっ、離してよ！」

きつく抱き締められ、エヴァは抵抗の限りに暴れ狂った。

「今までのことは、全て敵の罠だったんです……姫、目を覚ましてください！」

「いやっ、いやあ

！！」

ギルは、半狂乱のエヴァを胸板に押しつけるようにすると、噛みつく勢いで唇を奪った。

拳で何度も胸板を殴られたが、それでもギルはエヴァを離さない。

「…どうして？ どうしてそんなひどい事するの？ …あたしが…

そんなに憎いの？」

エヴァは震えながら泣き出す。

彼女が、精神崩壊を起こしたのは誰の目にも明白だった。

もう、その目はなにも映してはいなかった。

気を失ってぐったりとしたエヴァを抱きかかえて、ギルはその場から姿を消した。

（ああ なんて無念）

連れ去られた彼女の姿は、もうどこにも見えなくなっている。

追いかけてたい、追いかけて取り返したい。

けれど、もうそれはできそうにはなかった。

傷口から溢れる紅い命は、おそらく止まることはないのだろう。

エヴァ 泣いていないだろうか？

それとも、怒っているだろうか。

もう護れないのか

自分の妻を。

エヴァ…。

泥に汚れて擦りむけたソーンの頬を、幾筋も涙が伝った。

耳元で、雨音がうるさい。

雨音に混じって近づいてくる気配があったが、それを見られるほどの気力はもう残っていなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9079a/>

Golden B L O O D アストライア戦記

2010年10月16日02時39分発行